



史資料からみる

# 学習院

## 質実堅牢の石塀 —青山の女子学習院—



バックスタンド入口裏の石塀

青山通りから神宮外苑の銀杏並木の道に入り、途中を左に折れると秩父宮ラグビー場バックスタンド側入口に至ります。門の両側には高さ3メートルを超える頑丈な石塀が続き、ラグビー場とテニスクラブとを区切っています。石塀はラグビー場の南側と西側の一部にも残されていますが、それらがかつて女子学習院の塀であったことは現在ほとんど忘れられています。

学習院女子中・高等科の前身である華族女学校は、1885(明治18)年、四谷に開校しました。その後、永田町に移転し1906(明治39)年には学習院女学部が改組されます。永田町の女学部校舎は1912(明治45)年に火災で焼失したため、青山練兵場跡地に新たな校舎を建設することとなりました。建設にあたって女学部は、「質実堅牢」が建物の特色のみならず、自主自律の教育方針であることを強調しています。

新築に取りかかる際特に宮内大臣より「質実堅牢を旨とせよ」と内示されました。さて此の質実堅牢の四字はただに校舎造築の目標とすべきばかりでなく学生訓育の方針も亦此処に在るかと思存するのであります。蓋し質実堅牢は軽佻浮華の反対で他より容易に侵されず操持の堅きを意味するのであります。本学部は従来主として自治の精神涵養を以て訓育の中心としその鼓吹に努め来

たのでありますが茲に質実堅牢を標榜するのは自治の精神涵養を捨てたのではなく寧ろ自治の内容を充実せしめたのであります。蓋し己の地位に顧み自ら規し自ら律し敢て他に頼ることなきは之れ所謂自治であります。故に自治は自信の上に立ち質実堅牢は自治に導く第一歩といふべきであります。(『女学部通信』1917年7月)

1918(大正7)年に木造二階建の校舎群が完成し、8月に移転した女学部は、校名を女子学習院に変更しました。校舎は1923(大正12)年の関東大震災に際してもほとんど損傷を受けず、近隣の被災者や校舎を焼失した東京女子高等師範学校附属高等女学校(現お茶の水女子大学附属中学校・高等学校)の生徒を受け入れました。

質実堅牢を誇った青山の校舎も、1945(昭和20)年5月25日の空襲で大部分を焼失し、女子学習院はその後戸山への移転を余儀なくされました。焼け残った鉄筋の体育館なども戦後に取り壊され、石塀のみがおよそ百年にわたりその姿を留めています。その石塀も、神宮球場と秩父宮ラグビー場が場所を交換して建て替えられるなどの再開発によって、今後撤去される可能性が大きいと思われます。青山に女子学習院が存在した痕跡を、少しでも後世に残し伝えたいものです。

(学習院アーカイブズ 桑尾光太郎)



女子学習院本館(1925年)